

---

# 先生との1年間

菅谷美奈子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

先生との1年間

### 【Nコード】

N9172D

### 【作者名】

菅谷美奈子

### 【あらすじ】

最初はただの先生だった。まさかこんなことになるなんて、夢にも思わなかった。それに、離れる時がくるなんて、夢にも思わなかった。思いたくなかった。そんな私と先生の1年間。

## 第1話

「怖い・・・怖いよ・・・まじ怖いんですけど!」

心の中で呟く、否、叫んでいる私。

目の前では小柄な男の先生。

低い声が、シンとした、緊張感のある教室の中で響く。

それは中学の入学式だった。

うちの地元の中学校の入学式は、殆どが午後のお昼を過ぎた時間帯から始まる。

母の車に乗りながら、卸したての真新しい制服を見る。

車の窓には青く綺麗な空。

そして、真新しい制服に身を包む自分。

私は事情があつて学区外からこの中学へ進学することになった。

事情というのも、ただ単に、自分が通う筈の中学が遠い。

それだけのことなのだ。

仲の良い友達と離れるのは少々残念だったが、この中学へ通うことにした。

この中学での知り合いは数人しか居ない。

元は同じ小学校の友達だ。

母は、

「あんたのことだから、なんやかんやで大丈夫よ。友達くらい作れる作れる！」

なんて、本当に他人事だ。

思わず、「本当に母親なの？」と問いたくなるものだ。

車を降りる。

小学校の時、同じクラスだった友達に会う。

母は「あらァ、こんにちはァ！」

なんて、独特の語尾の長さが気になるが世間話をしている。友達に話し掛けられる。

「小春！同じクラスだといいね！！」

この子の名前は『稲場早紀』

因みに私の名前は「桜井小春」ちゃんと覚えておくよーに！

「そうだね！早紀と絶対一緒のクラスがいいなあ」

こんなの嘘だ。

別にこの子と一緒にのクラスなんてなくてもいいのだ。

まあ、子供ながらの気遣いといえますか、一般的な御世辞？

駆け足で玄関前に貼られているクラス表を見る。

あ、あった。

10秒で見つけられた。

もっとスリルを味わいたいですよね、ホントにも！

教室は4階。

土地が傾いているとかで、よくわからないけれど階段の数が異常に多い。

最低でも1年間、4階に行くにはこの階段を登らなければならないと思うと、やはり溜息が出た。

早紀とは別のクラスだが、私が1組で早紀が2組。体育の授業では合同らしい。

他愛もない話をしながら、互いに自分の教室の前で少しニヤつきながら目を合わせた。  
我ながら、やっぱり未だ子供染みてるところがあるんだな、と思いながらも教室へ入る。

ガラッ！

と、勢いよくドアを開けてしまった。

少なからずだがドア付近の席の男子が此方を見る。

近くの席同士の者は、「あいつ誰だ？」みたいな顔を向けてくる。

私の席は、どうやら真ん中の1番前らしい。

名札を取りに行くべく、目の前の先生に話し掛ける。

「あの一……」

「ん？」

小柄な男の先生。

「ん？」という言葉だけを聴いただけで、結構声の低い先生なんだな、と、すぐわかった。

今まで保育園から小学校を卒業するまで、私は1度も担任の先生が男になったことはない。

だから少し男が苦手だ。

父は単身赴任で居ないし、兄弟も居ない。祖父は、母方にも父方にも居ない。

「な……なふだ、いいですか？」

「おお。名前は？」

「桜井・・・です。」

「下。」

は？

名札って、苗字だけでしょ？

何この人。なんて思いながら黙ってしまった。

「いいから。下の名前！」

結構強く言われた。  
怖い。

「こ・・・っ、小春・・・です！」

「ほい。」

それだけ？！

・・・それから席に座る。何か視線を感じる。

そう、目の前に居る変な男だ。

咳払いがまた怖い。

そして見られている！

「怖い・・・怖いよぉ・・・まじ怖いんですけど！」

私は小刻みに震えながら、心の中で叫んでいた。



## 第2話

式が始まるというので、出席番号順に並ぶ。

私は「56番」。

女子の中で「6番」と思ってもいいのだと思う。

出席番号「52番」と思われる子と、出席番号「64番」と思われる子と目が合った。

勿論そこは笑顔でにっこりと。

因みの因みだが、先生の前では「明るくて真面目で、頑張り屋で努力家」というレッテルが貼られている私。

それは小1の頃から。

無論、私は友達の前でも「親切で、明るくて、いつも場を笑わせる」という役の設定だ。

自分で言う则可笑しくなるが、これは事実。

この2つのレッテルは必ず守り通さなければいけないのだ。

だから、さっきのあの男にも、これをわかってもらわないといけないのである。

例え嫌な先生でも、ぶりっ子して

「せんせえ〜っ?」

なんて甘えれば、大抵の先生は落ちる。

だからアイツも・・・あの男も・・・!

なんて思っていたのであった。

そして式は終了。  
教室へ戻る。

そこで待ち構えていたのは小太りの眼鏡の先生だ。  
可愛い目をしている。

「いや、ごめんね！

僕がこのクラスの担任の・・・山崎孝男といいます。」

黒板に名前を書きながら、顔の汗をハンカチで拭いている。  
暑くはない筈だ。小太りのせいかな、緊張のせいかな、汗は尋常じゃない。

「さっきの先生は副担任の大城康先生ね。  
数学の先生ですよ。あ、僕は音楽ね！」

だがクラスの皆は無反応。  
大分緊張しているらしい。  
皆机を見て、黒板を見ようとしない。

先生も苦笑していた。

そして明日から  
華の中学校生活が始まろうとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9172d/>

---

先生との1年間

2010年12月4日15時02分発行